

藩士菊池大學の臣小原平右衛門の子で、同家臣加藤九太夫の家を嗣いだ。夙に天文曆數火術の學を柴野美啓・西村篤行に修め、後黒川良安に就いて西洋の説を聞き、遂に遠藤高嶽に推されて、嘉永末年以降西洋流火術方及び壯猶館の製藥方・測量方・鑄造方の諸職を歴、砲術師範となり、安政二年八月天文方に轉じ、六年八月歿した。

カトウトヨフサ 加藤豊房 通稱駒之助・甚左衛門。實は前波景秀の次男で、加藤八右衛門門元元に養はれ、文政十一年道知百石を襲ぎ定番組に列した。豊房天保七年明倫堂の讀師に任ぜられてから、訓導・助教を経て、遂に教授兼侍讀に進んだ。歿年未詳。

カトウノリタダ 加藤矩忠 通稱甚五兵衛。初め御歩から小頭に進み、寛政三年三十人頭として百石を領し、後五十石を加へ、組外に班し、文政六年十二月廿六日隠居して十人扶持を受けた。

カトウヒコザエモン 加藤彦左衛門 御馬廻組、知行二百石。天和元年七月悴次郎左衛門が、金澤材木町兩替商人田上屋又兵衛を津田太郎九郎の家にて殺し、金子を奪ひ取つたこと露顯した爲、次郎左衛門は中川米女に御預となり、その後牢舎刎首に處せられ、太郎九郎は切腹、彦左衛門は十二月廿八日御領國江戸御構遺放となり、若黨笹村彌八郎は殺害を命ぜられた。

カトウマサツグ 加藤正次 通稱牛之助。父五郎左衛門正貞は中川宗半の臣であつた。正貞の歿後、正次は前田利常に仕へ、寛永五年新知百五十石を受け、十一年二十石を加へ、正保元年御歩小頭に任じ、承應二年正月十日

小松に於いて歿。子孫世々藩に仕へる。
カトウマタエモン 加藤又右衛門 前田利長に越中守山に仕へて新知二百石を受け、後青山佐渡吉次に屬せしめられ、元和八年青山豊後長次の死後前田利常から先知二百石を賜はり、寶永六年歿した。子孫五代半左衛門潔幸獄死して家系斷絶した。

カトウモンベエ 加藤紋兵衛 長氏の家臣。慶長五年大聖寺の役に従うて創を受け、加増して四百石を賜はり、組頭役を命ぜられた。次いで大坂前役に鑑奉行を勤め、後役には番闘して功を立て、元和四年三月十四日歿、其の子米女家を繼いだ。

カドシマ 角渡島 門島又は角島とも書く。鹿島郡鶴浦の東北方にあつて、周圍六〇〇米。陸を距ること僅かに四米、石垣を以て相連絡し、島上觀音堂がある。能登名跡志に「此灘の尾なる故角島といふことなり。此崎を廻れば中山の郷など、灘に十三ヶ村あり。越中水見へ出る也。此角島に觀音あり。靈驗ありて龍燈折々あり。椿森共椿寺共云ふ。坊守觀音院とてあり。磯に舟の懸り間あり。水石の名物也。」と記するが、之を椿森とも椿寺ともいふとしたのは誤で、それは別である。觀音堂の漆箔押額面に鹿渡島觀音鶴夢拜書とあるのは、加賀藩の老臣本多政敏の筆跡であり、裏書によれば正徳五年の作である。

カドマツ 門松 藩政の時正月の門松は、城内及び高祿の士にして、特に町會所を経て藩から松を拜領することのできる特定の家だけに立てたが、その他の武家でも町家でも立てなかつた。松樹は特に藩の保護する所であつたからである。門松は前年の晦日又はその

前日に門・式臺・中式臺・臺所に飾られ、正月六日の夜にはそれを撤して、その跡に眞松を挿しておいた。この眞松は十四日年越に除くものであつた。

カトヤキチエモン 加登屋吉右衛門 大樋焼の陶工。大樋五代勤兵衛の門下で、卓越の手腕があつた。吉右衛門の子を長壽といひ、明治以後加藤氏を冒した。

カトヤマサキチ 加登屋政吉 大樋焼の陶工。大樋五代勤兵衛の股肱とした門下で、五柳軒と號し、安政の頃扶持を給せられて、藩の御細工所に勤務してゐた。二代政吉を經、三代伊助河村氏を冒し、明治に入つて業を廢した。

カドヤヤジエモン 角屋彌二右衛門 石川郡松任の人。初め父清右衛門の時から町年寄であつたが、寛文十年十二月その職を除き、同町橋屋太右衛門に代つて御旅屋守となり、扶持高三石を賜はつた。

カナアラヒザハ 金洗澤 ↓キンジョウレ イタク 金城靈澤。

カナイチシンボ 金市新保 河北郡井上庄に屬する部落。

カナイハ 金石 石川郡大野庄に屬する部落。舊名を宮腰町といふたが、慶應二年隣邑大野と合併し、金石之交の語をとつて金石町と稱し、舊の宮腰を金石本町といひ、明治廿二年上金石となり、大正九年また金石と改めた。金石は冬瓜町・海禪寺町・上本町・下本町・本町・長田町・重磨寺町・今町・新町・達磨町・横町・味噌屋町・湊町・古河町・松前町・上濱町・濱町・新湯町・上新濱町・下新濱町・通町・上寺町・下寺町・鐵砲町・上越前町・下越前町・御鹽藏

町・御船町・相生町・松原町に區分せられる。

カナイハオウカン 金石往還 金澤の郊端廣岡口から石川郡金石港を連絡する五軒餘は、藩政時代の設計として世にも珍しい直線道路である。元和二年前田利常が今枝内記・浦興右衛門等に命じて造らせたもので、それを直線ならしめる爲には、篝火を焚いて繩を引いたものといふ。元來曲折してゐて城中本丸から瞰下するに見苦しかつた爲改造したといふが、當時の道路は尾川線で、城からは見えない筈である。寧ろ交通上の利便を謀つたものと見るべきであらう。

カナイハコウ 金石港 石川郡尾川の河口にあつて、舊名を宮腰港といふた。暗礁砂洲なく、出入西南風によく東北風に不便である。附近波濤の侵蝕によつてその海岸を崩壊せしめること多く、大船はこれに近づけない。

カナイハヨジノスケ 金岩與次之助 前田利家に尾州荒子で仕へ、二百石を受け、御馬廻組に班した。子孫相繼いで藩に仕へる。

カナウラ 金浦 進士修理亮時舎記永祿二年に、十一月附島丸殿宛所足利義輝の御内書案があり、「諏訪信濃守知行分加州金浦村事、嚴重に雖申付候、至去年分令押領由云々」とある。後世石川郡にも河北郡にも金浦郷はあるが、金浦村は存せぬ。

カナウラゴウ 金浦郷 石川郡と河北郡とに跨る。藩政時代では石川郡に田井・牛坂・牛首・館・土清水があり。河北郡に鈴見・若松角間・上田上・下田上・鎌子口・谷口・打尾谷・中山・俵等・中野・袋・炭釜・木目谷・平等・小豆澤・湯谷澤があつた。金浦郷の二郡に跨るは、舊の加賀郡の一部が石川郡になつたからである。